

研究レポート

基礎看護学領域における近年の学生の
学びに関する文献検討
An Examination of Literature on Student
Learning in Recent Years in the Field of Basic Nursing Studies

安藤幸枝・岡本明子*

要旨

目的：基礎看護学領域での学生の学びに関する文献を通して、学生は何を学びとしていたかについて動向を把握し、研究課題を導く。

方法：医学中央雑誌Webを用い、キーワードを「基礎看護」、「看護学生」、「学び」、「成長」とし、文献 2017年～2022年で検索した。69件のうち基礎看護学領域の文献に該当する13文献を対象とした。

結果：13件の内容は、1) 学生の自己教育力評価と演習後の学びの深まりとの関連に関する内容 (2件)、2) 授業・演習後の協同学習や学びの諸相に関する内容 (9件)、3) 学生が日常生活を学んでいく力など (2件) と分類した。

考察：授業及び技術演習では、学生の主体的な学びを啓発するために、ポートフォリオなどの様々な試みがされており、基礎看護学での試行錯誤がうかがえた。本研究における基礎看護学の学びに関する課題は、能動的、主体的な学びを啓発するための教育方法が、学生にとって学びの動機づけになるような内容が望まれた。

Key words : 基礎看護、看護学生、学び、成長

Abstract

Objective: To grasp recent trends related to students' perception of learning by reviewing literature on student learning in the field of basic nursing studies and to thereby derive a research task.

Methods: Ichushi Web was used to search literature from 2017 to 2022 with the keywords "basic nursing," "nursing students," "learning," and "development." Out of 69 articles, 13 articles in the field of basic nursing studies were selected for examination.

Results: The thirteen articles were categorized as follows: 1) articles concerning the relationship between student assessments of their abilities to self-educate and the deepening of learning after completing exercises (2 articles); 2) articles concerning various aspects and phases of

* 昭和大学保健医療学部看護学科

cooperative study and learning after completing lectures/exercises (9 articles); and 3) articles concerning students' abilities to learn daily life (2 articles).

Discussion: It was found that various efforts, such as portfolios, had been carried out in lectures and technical exercises in order to promote students' autonomous learning. As such, various attempts and efforts in basic nursing studies were observed. In the present study, regarding tasks related to learning in basic nursing studies, contents with education methods that aim to promote active and autonomous learning, which motivate students to learn, are desirable.

Key words : basic nursing, nursing students, learning, development

I. はじめに

看護基礎教育検討会報告書では、人口や疾病構造の変化に合わせた療養の場の多様化や、それに伴う多職種との連携の必要性と、社会の複雑化に対応しうる看護を創造する能力が求められる(厚生労働省, 2019)と報告している。これを受けて、看護学教育において、継続した教育体制や教育環境の見直しがされている。特に学生が主体的に学ぶことができる教育方法は重要で既に周知の事であるが、社会の状況に合わせてさらに推進していくことは言うまでもない。また平成4年の「看護師等の人材確保促進に関する法律」の施行を契機に、看護系大学が急増し、看護学の学士教育として世の中でなにか期待されているのかが問われるようになってきた。こうした中、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を主眼とした、看護学教育における質の保証について提言がされた(文部科学省, 2017)。看護学教育モデル・コア・カリキュラムにより、各大学において社会の変遷に対応した看護実践能力が備わるような人材の養成を涵養すべく学士課程の充実を求めている(文部科学省, 2017)。これらにより、各教育機関では学生の学びや成長が育まれるような教育方法を提供していると考えられる。

基礎看護学においては、大学入学とともに、「看護学」とはなにかという抽象的なことを探求しながら自身の身体を活用し、指先を細かく使うような診療の援助技術を学ぶことが学生

にとっては多様で、修得に関しては容易ではない。また、青年期における不規則な生活習慣や人間関係の希薄化など(中央教育審議会, 2006)の指摘から、これまでのさまざまな生活背景をもつ学生が、他者に対する日常生活援助を学んでいくことも困難に違いない。授業や演習は多岐に渡り、具体的な到達目標がつかみにくい。それでも看護学教育の方向性や、カリキュラム改正に合わせて基礎看護学教育として、学生の学びをどのように教授すれば良いかが問われ続けており検討する必要がある。

そこで本研究において、基礎看護学領域での学生の学びに関する文献を通して学生は何を学びとしていたかについて動向を把握し、研究課題を導くこととした。

II. 研究目的

基礎看護学領域での学生の学びに関する文献を通して、学生は何を学びとしていたかについて動向を把握し、研究課題を導く。

III. 研究方法

1. 文献検討の方法

論文データベースの医学中央雑誌記事索引Web版(Ver5)を用いて、キーワードを「基礎看護」、「看護学生」、「学び」、「成長」として、2017年～2022年を検索した。検索の結果、69件の論文が得られ、要旨を確認し基礎看護に関連した授業および演習に該当する13件を分析の対象とした。また絞り込み条件として、抄

録あり、会議録を除く、看護を設定しANDまたは、ORを組み合わせて検索した。2017年～2022年を対象期間とした理由は、2017年に「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が策定されていたため、それ以後の研究を参考にした。

2. 分析方法

対象論文のタイトル、要旨、研究対象者、目的、結果を中心に精読し、基礎看護の科目として取り扱っていると思われるものや、つながりがあるものを対象とした。13件に対して、教育方法別にまとまりを作り、研究の概要から「学生は何を学びとしていたか」について抽出して分析した。分析結果をもとに「学生の自己教育力評価と演習後の学びの深まり」「授業・演習後の協同学習や学びの諸相」「学生が日常生活を学んでいく力」などについて、学生は何を学びとしていたかを記述した。

3. 用語の定義

「学び」とは、学生が授業や演習のなかで感じた新たな知識、気づき、気持ちの変化、振り返り思考した内容とする。

IV. 結果

基礎看護に関連した学生の学びに該当した文献は13件であった。内容は、1. 学生の自己教育力評価と演習後の学びの深まりとの関連に関する内容が2件、2. 授業・演習後の協同学習や学びの諸相に関する内容が9件、3. 学生が日常生活を学んでいく力、など2件と分類した。

1. 学生の自己教育力評価と演習後の学びの深まりとの関連に関する内容

学生の自己教育力について、尺度を用いて自己の教育力と影響する要因を明らかにした研究(今村・山口・中俣・田中・松成, 2018)では、能動的学習への転換を図るために、復習や予習を兼ねた小テスト、事前学習の提示や演習課題のプレゼンテーションを導入していた。また、

自己教育力を育成するために、学生の学習状況について「見える」化を目指した。学生は、看護援助の基盤となる基礎看護技術などを学ぶ中で、「成長・発達への志向」を強めていた。

自己教育力と演習前後にポートフォリオを用いた記述の深まりに関する研究(小西他, 2021)においては、点数化した自己教育力と、技術項目のポートフォリオを活用し、演習前、演習中、演習後の記述内容の深まりを分析した。対象者全員の平均値では、「I成長・発達への志向」の平均値が最も高く、「IV自身・プライド・安定性」が最も低かった。ポートフォリオの活用により、学生が課題を見出す自主的、主体的な学修を促すことに重点をおいた内容となっていた。

2. 授業・演習後の協同学習や学びの諸相に関する内容

授業や演習における学生の学びの諸相に関する研究では、自由記載や振り返り用紙を用い、質的、量的など様々な分析方法を用い学びの諸相を明らかにしていた。

臨床教員の参加型の演習(神宮寺・横山・蛭子, 2017)、(佐藤・小葉・志田・吉田・城野, 2019)では、臨床教員が演習に参加することで、臨床現場のイメージ化が図れる、臨床指導者、学生、教員との関係の構築への期待、また手技のコツを知ることから、実践的な看護への関心が高まることが挙げられていた。

演習後の学習活動、グループ活動に関する研究(川村, 2017; 元木他, 2020)は、学生同士で役割分担や協力をしながら看護技術を行うことで、技術の習得の促進や、またグループワークでの場作りを行うことから、自分の存在価値を見出しグループ活動が促進していくことを学んでいた。

学生の能動的な学び(小松他, 2020)、アクティブラーニングによる演習(石田・中本, 2020)など、学習方法による学生の学びについては、自己表現や思考が促されることを学びと

して報告している。また、看護技術の学びにおいて、技術項目の振り返りでの学び(綱木・久野・藤澤, 2017)、(上田・菅沼・小林・石川・溝口, 2018)、シミュレーション演習(鈴木・刈部・熊谷・下村・田中, 2017)において、演習体験から患者への安寧や安全への考慮の必要性を考えることが、思考の深まりとなっていた。

3. 学生が日常生活を学んでいく力に関する内容
一人暮らしの看護学生と看護についての学びを関連させた研究(須藤・平川, 2018)では、学生の日常生活と学びから看護に対する考えを形成していくプロセスにおいては、環境調節、食事、日常生活での経験から看護の学びにつなげていた。また、生活者としての学びと看護の学びを総体的に意味づけしていた。

4. 実習前の準備に関する内容

基礎看護学実習 I 前の OSCE を通した、学生の成長と課題を明らかにした研究(服部・山本, 2020)では、事前課題の掲示から実施までの一連のプロセスに着目していた。学生は準備段階から、事例患者の状況をイメージし複数のパターンを考え個別性に配慮していることがわかった。また、練習したことが根拠に基づく実践、対象者への配慮への学びとなっていた。

V. 考察

1. 学生自らが力を発揮することができるような導き

学生の学びの諸相から見えた動向については、基礎看護学に関連する内容を対象としたため少ない文献ではあるが、教育機関により様々な取り組みがされていることが分かった。文献検討の結果より以下に考察する。

各教育機関により工夫を凝らした教育方法で、看護実践能力を育成するために、学生の学びを引き出そうとしていることが分かった。学生の学びは「学生の自己教育力評価と演習後の学びの深まり」「授業・演習後の協同学習や学

びの諸相」「学生が日常生活を学んでいく力」などであることがわかった。いずれも学生の学びであるか、教育する側から見た学生の学びであるか、はっきりと断定できない内容となっていた。しかし、学生のもつ能力を学生自身の力で発揮することができるものであった。はっきりと断定できないのは、学生が何を学んでいるのかに関して、今村他(2018)の研究に代表されるように自己教育力の尺度を活用し、学びを自己教育力として特有な表現をしており、数値として明確であるが個々の学生の学びと成長まで明確にされていないためといえる。この自己教育力について梶田(1990)は、自己概念の視点から、学生が生涯にわたって自己教育を可能にするためには、学生自身が自分を理解し、努力をすれば成果が得られるということを実感できるような関わりが重要だと教育する側の視点で述べている(pp.31-32)。文献を概観する中で、学生自身の力を発揮させるために、学生にとって達成感が積みあがるような関りをしようとする教育を探求する動きがあることがわかった。

また、基礎看護学を学ぶ学生は、学習が進むにつれてイメージ通りにできないことから抱く自信のなさ、自尊心の低さと青年期特有の不安定さがあると報告され(今村他, 2018)、学士教育においてプロフェッショナリズムを意識せざるを得ない困難さも示唆していた。

学生自身の力を引き出そうとする背景には、看護学教育モデル・コア・カリキュラムが影響していると考えられる。本文献検討においては、看護学教育モデル・コア・カリキュラムを反映した教育内容に該当する文献は見当たらなかったが、石田他(2020)による、アクティブラーニングを通して、学生の学びや気づきから思考が促されていること、小松他(2020)による能動的な学習の展開法や、佐藤他(2019)の臨地実習指導者が参加をした演習、元木他(2020);小松他(2020)によるグループ活動の促進を図った内容や、協同学習などから学生の学びを

引き出したものが考えられた。これらは、1, 2年生を対象とした研究であるものの、看護学教育モデル・コア・カリキュラムでの看護職として求められる基本的な資質・能力を獲得するための学修内容と窺えた。また、表1のNo6の文献を除いた12件は学士教育の内容で、この視点で学生を導こうと試行錯誤しているように見えた。大学におけるカリキュラム作りは、教育方法の向上に向けた取り組み、教育の質保証などを組み入れることを目標として、大学の裁量に任されている(松本, 2022)。そのような中で、いかに学生に効果的に学ばせるか、教育方法に苦心も見えた。

一方で、小松他(2020)の研究では学生の学びを推進しようと、eラーニング、自己学習に適した教科書や教員指導日の活用など準備をしたが、実際には学生の活用状況は低いとの報告をしていた。これは、カリキュラムの過密さや、看護専門職という技術職を目指す学生の特徴である、課題の多さから学生生活に余裕がなくなり結果として学習意欲に影響を与えることや、学生のモチベーションが低下することが考えられた。学生にとって、無理なく取り組むことができ、関心が高まるような教材の提供が必要とされる。

さらに、元木他(2020)、小松他(2020)学生の能動的、主体的な学びを引き出そうとした教育方法について、グループでの学習による学びを報告していた。ここでの学びにおいて、学生は自身だけの学びではなく、メンバーと協同学習について、メンバー間での意見交換によって、自らの意見が他者の役に立てていることに喜びを感じていた。学生が能動的や主体的な学びを促進するためには、自分の意見が言える安心できる環境や人のつながりなども学生にとって大きな役割となっていることがわかった。また人の役に立てていることが自己を肯定する気持ちと対応し、そのことがモチベーションになっていたと考える。

学生が何を学んでいたかについて、基礎看護

学に関しては、看護学を学び面白さを探究する力をつけるためのさまざまな試みのプロセスが報告されていた。渦中にある学生達も何かしらを学んでいると示唆され、また自らの進もうとする学問を理解しようとするに懸命に取り組んでいることがわかった。西村(2007)は、実習上での学生の学びが具体的な体験によって対象と向き合い、課題を通して悩み、他の学生とディスカッションを重ね、ここから患者へのケアが実践できると述べている(p.29)。講義や演習で対峙する課題に対しても、学生は自分たちなりに取り組む経験が学びとなっていると考える。

2. 今後の研究に向けた課題

授業及び技術演習では、各教育期間において学生の学びを啓発するために、主体的、能動的な教育方法を取り入れており、各教育機関で試行錯誤がうかがえた。基礎看護学の学びに関する課題は、能動的、主体的な学びを啓発するための教育方法が、学生にとって学びの動機づけになるような内容が必要とされた。

利益相反

本研究にあたり、開示すべき利益相反はない。

文献

1. 中央教育審議会(2006). 青少年の意欲を高める心と体の相伴った成長を促す方策について.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06112713/001.htm (参照 2023年1月4日)
2. 服部智子, 山本加奈子(2020). 実習前OSCE後の振り返りシートからみる学生自身が捉えた学び. *Japanese RedCross Hiroshima Coll, Nurs.*20, pp.25-33.
3. 今村圭子, 山口さおり, 中俣直美, 田中久美子, 松成裕子(2018). 基礎看護技術を学

- 習する看護学生の自己教育力に影響する要因の分析。鹿児島大学医学部保健学科紀要, 28巻1号, pp.31-39.
4. 石田智恵美, 中本亮 (2020). アクティブラーニングによる演習と看護学生の思考に関する研究。福岡県立大学看護学研究紀要, 17, pp.47-56.
 5. 神宮寺陽子, 横山なぎさ, 蛭子真澄 (2017). 基礎看護技術演習に臨床指導者が参加することの効果—学生の学びと臨床指導者の反応から—. 看護教育研究学会誌, 第9巻2号, pp.13-21.
 6. 梶田叡一 (1990). Ⅲ「自己教育力の育成・再考」自己教育の構えと力：自己概念の視点から。教育心理学年俵, (29), pp.31-32. DOI https://doi.org/10.5926/arepj1962.29.0_29 (参照 2023年1月7日)
 7. 川村直子 (2017). 基礎看護技術修得に向けての学習活動状況と実技試験結果との関連。秋田県看護教育研究会誌, 41号, pp.17-23.
 8. 小松妙子, 村中陽子, 稲野辺奈緒子, 村越望, 田村かおり, 戸田すま子 (2020). 学生の能動的学修及び思考・判断の自己表現を促す看護技術教育の検討。秀明大学看護学部紀要, 2 (1), pp.35-44.
 9. 小西由起子, 脇坂豊美, 岡本朋子, 田畑愛実, 板垣紀子, 山居輝美, 前川幸子 (2021). 看護学生の自己教育力と看護技術演習におけるポートフォリオの記述内容の深まりの関係。甲南女子大学研究紀要Ⅱ, 第15号, pp.19-26.
 10. 厚生労働省 (2019). 看護基礎教育検討会報告書。
<https://zenhokyo.jp/doc/20191016-houkoku.pdf> (参照 2023年1月4日)
 11. 松本啓子 (2022). 第1回：新カリキュラムの実施に向けて看護系大学が取り組むべき課題。看護教育の情報サイト「NurSHARE」
<https://www.nurshare.jp/article/detail/10097> (参照 2023年1月4日)
 12. 文部科学省 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得をめざした学修目標～. 大学における看護系人材の在り方に関する検討会。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (参照 2022年12月27日)
 13. 元木絵美, 小路浩子, 丸山有希, 鷺田幸一, 玉木敦子, 野並葉子, 福山敦子, 西方弥生 (2020). 看護基礎教育にコミュニティ・オブ・プラクティスの考えを採り入れた「学びのグルー プゼミ」での学生の学び。神戸女子看護学紀要, 第5巻, pp.11-22.
 14. 西村ユミ (2007) 交流する身体<ケア>を捉えなおす。pp.29-31, 東京：NHKブックス。
 15. 佐藤垂月子, 小葉祐子, 志田久美子, 吉田千鶴, 城野美幸 (2019). 基礎看護技術演習に臨地指導者が参加したことにより1年次前期の学生に及ぼす影響。帝京科学大学紀要, Vol. 15, pp.115-119.
 16. 須藤みつ子, 平川美和子 (2018). 看護学生が日常生活経験と看護についての学びから看護についての考えを形成していくプロセス—一人暮らしを始めた学生のインタビューより—. 保健科学研究, 9 (1), pp.19-27.
 17. 鈴木真由美, 刈部亜美, 熊谷寛美, 下村美枝子, 田中真由美 (2017). 基礎看護学領域のシミュレーション演習における学生の体験と学びの様相。飯田女子短期大学紀要, 第34集, pp.47-67.
 18. 綱木政江, 久野暢子, 藤澤怜子 (2017). 基礎看護技術教育での学生の学びの深まりを促す教育的介入策を探る—振り返り用紙の分析—. 山口大学大学院医学系研究科基礎看護学 山口医学, 第66巻第2号,

pp.113-122.

19. 上田葉子, 菅沼澄江, 小林洋子, 石川文江, 溝口孝美 (2018). 基礎看護援助技術における環境の授業を通しての学生の学び—講義前・講義及び学内演習後から—. 群馬医療福祉大学紀要, 第6・7号, pp.67-73.